

通信句会 高得点句 自句自解

第九十八回通信句会（平成二十二年夏）より、高得点句を作句された方に、解説文を書いていただく事にいたしました。

十一 点③

ひまわりや赤子に強き意思のあり 藤本 友子

四月に初孫が誕生し、夏に初めて泊った時の句です。生を受けてわずか五ヶ月にもかかわらず、お乳を欲しい時、眠たい時、抱っこして欲しい時、自分のその思いを訴えて泣き続ける。それは本能と言えはそれまでですが、私は小さな命が懸命に生きていこうとする力強さを感じました。そして、猛暑の中、たくましく庭に咲いていた「ひまわり」と取り合わせた次第です。よく孫俳句は甘くなるので避けた方が良いと言われますが、誕生の記念になればと思います。

十一 点①

はね返す光を掃くや夏落葉 小川名梅乃

記録的な八月の猛暑が続く炎天下。家の周りのアスファルトの道を「無」になって掃除をしていた時に一句を成した。八月の太陽光線は万物すべてのものに勢いよく跳ね返し、乱反射していた。前夜の台風と朝からの熱風で焦げつくような夏の落葉が散乱する道。竹箒でひたすら一心不乱に掃く。流れる汗の顔。一瞬駆り立てられるように何度も反復し、己の詩心をそのまま五、七、五にまとめた。「はね返す」を平仮名に表現する迄、数日、心に留めておいた。すっかり涼しくなったこの頃、改めて詠み返すと、尋常ではなかったあの暑さと良く闘ったものだと思えている。

九 点

汗の手のもどかしニトログリセリン 増田 守

十数年前から心臓疾患にかかっている。発作時の頓服薬としてニトログリセリン製剤を処方されている。度々使用する訳ではないが、暑熱の時期には、本剤を舌下に差し込む手の動きがもどかしいことがある。

八 点①

初めての家庭菜園夏帽子 小川名みさ

男が趣味で庭の片すみを家庭菜園にしておりましたが、高齢になり男に代わり生れて初めて野菜やトマトを植えてみました。暑さの中で大変でしたが、収穫中にこの句が出来ました。野菜、トマトの収穫と句の収穫の夏でした。

八点①

針箱に半端の釦秋立ちぬ

稲葉 幸

そろそろ涼しくなってきたので縫物でも始めようかと針箱を出しました。着古した洋服を処分する時にボタンを取り外します。(リホームをする時に使うつもりで)その時のボタンの一つ、二つが針箱に無造作に転がっていました。

七点④

四方から見られ育ちぬ屑金魚

佐渡谷秀一

数尾いくらの金魚とはいえ、狭い金魚玉にひらりひらりと泳いでいるのは、雑然とした部屋の中では仲々優雅である。駄目な子ほど可愛いという程のことはないが、励まされもせず水草と共に元気に育っている。

七点①

一葉のはがき嬉しき大暑かな

佐渡谷秀一

今年の夏の暑さは格別であった。朝方から硝子戸の向こうに見える太陽の輝りつけは、約束のない限り外出するのを躊躇された。携帯電話はあまり好きでない。そんな時、一寸した残暑見舞いの葉書は嬉しい。

「三通の封書したたむ辱暑かな」という駄句を作ったのを思い出した。

六点①

風抜ける三和土の職方三尺寝

稲葉 幸

植木屋さんが境内の鐘楼で気持ち良さそうに昼寝です。裏に山を背負い、周囲は枇杷、桜、栗、百日紅、木蓮などの木々がありました。頭に手拭いを被ったまま、大の字になって気持ちよさそうでした。傍らには、蚊取り線香も置いてありました。

六点①

青春のおののき遠しはたたがみ

佐渡谷秀一

南こうせつの「神田川」が今もなお名曲たる由縁は、「ただ、貴方のやさしさが怖かった」というフレーズにあるだろう。将来への不安を始め、よく理解できない現象、出来事への怖れは、青春のものである。年を重ねた今は、理解外の事象は相変わらず数々あるが、心を煩わすことなく、全て曖昧に受け入れている。

六点①

夏蝶は黒きドレスか風が来る

秋山 佳史

朝、庭に出たら、小枝にはりついた「黒」。それはいつばいに広げた羽根だった。誇るかのごとく、それでいて孤独な夏蝶。なぜか往年のステージの越路吹雪を思い出した。シャンソンと黒いドレスなのである。ふと、蝶は瞬間の動きを見せた。小さな風がきたのか、すぐに消えてしまった。

六点

モンローの紅き唇凌ぎ花

岩野ヤエ子

毎日のように通り過ぎる近所の家に見事な花を咲かせる凌ぎ花があり、毎年、匂にしたいと思っていた。今年も、猛暑の中、強烈に、自己主張するかのように真紅に咲いている花を見ているうち、何故か突然、マリリン・モンローを思い出した。

六点

梅雨寒や先ず目を通す訃報欄

平井 与史

最近とはみに友人や知人の訃報を手にするが多くなり、一抹の寂しさを感じます。新聞を読むのも楽しみの一つですが、何となく訃報欄（特に地方新聞）に先ず目を通すのが慣いとなりました。目下、二つの癌と闘病中ですが、出来ることならば、適当な時期にさりと人生の轡を下ろしたいと思っています。

六点

夏の雲樹海に影を落としたり

岩野ヤエ子

雨上がりの気持ちよく晴れ渡った日、妙高高原を山仲間と歩いていた。足は軽く、思わず歌が出てきて、若い頃に戻ったようであった。ふと見ると目の下にずっと広がる樹林に雲が影を落としていた。影のところは濃い緑、他は明るい緑で、自然が創り出す雄大な造形に感動した。

六点

新しき遺影飾りぬ夏座敷

藤本 友子

五月に義母が九十七歳で他界しました。義母とは、結婚当初からの同居でしたので、実母よりもずっと長く一緒でした。逝ってしまった義母の部屋はひっそりと静まりかえり、寂しさが漂っています。夏に入り、涼し気なカーテンやテーブルクロスに替えて気分を一新し、母の写真も飾りました。少しほほえむ遺影は、いつも私達家族を見守っていてくれるように思えます。